

「名前」——私になること——

佐藤 文子

最近、ある読書会でポール・トルーニエの「What's in a name」という本を読んだ。題を直訳すれば「名前に含まれていること」ということになろうか。

全ての事物には名前がある。ことばを覚え初めた頃の子どもは、「これなに？」を連発し、物の名前を知ろうとする。事物の名前を知ることによって、私たちの世界は整理され、まとまりをもってくる。私たち一人ひとりにも名前がある。しかしこれは事物の名前とは多少異なるようである。「本」「机」「鉛筆」……これらは同じ類の物に与えられた名前であるが、人には一人ひとり異なる名前がある。「これなに？」「ひと」ではなく、「あなたの名前は？」「佐藤文子」である。

赤ちゃんが生れると名前がつけられる。大てい、親は、子どもが生れる前、まだ母親のおなかにいる間に、子どもの名前を考える。女の子だったら「花子」に、男の子だったら

「一郎」にしよう……と。時には今度生れるのは男の子にちがいないと決めて、男の子の名前しか考えていなかったのに、女の子が生れてあわてるといふようなこともある。

親はどのようにして子ども名前を決めるのであろうか。学生の名簿を眺めてみる。さまざまな名前があるが、どれも立派な名前であることに今さら気づく。少し挙げてみよう。

女の子では「智子、聡子、佳子、雅子、睦子、美智子、真理……」

男の子では「力、悟、哲一、誠一、真二……正徳、善則、正剛、優幸、忠信、英輝……」となると、こんな立派な名前をつけられた子どもは大変だなと思ってしまう。

親はわが子の名前を決める際に有名人、偉人の名前をもらったりする。読書会にはアメリカ人も参加していたが、欧米では聖書の人物の名前をつけることも多いそうである。また祖父母、叔父、叔母、知人等の名前の一部をもらったりもする。その場合でも、若くして病死したり、不幸な生涯を送った人の名前は回避される。健康で、幸せな生涯を送った人の生にあやかると親は願うのである。

日本では、漢字の意味に加えて、画数や形を占ってもらい決めることも多い。——最近若い人々の間でこの傾向はふえているようである。

いづれにせよ、親は、子どもが幸せに、健康に、そして願くば立派な人になってほしいと願い、期待して名前を選ぶのであろう。そしてこのような期待は子育てにとって大事なことである。しかしここでトルーニエは、このような期待が、しばしば子どもに対する親

の「所有欲 (Possessiveness)」と分ち難く結びついていることに注意をむけるように、読書に語りかけるのである。

「わが子」という愛着の気持は、親子の絆を形成し強める重要な土台であろう。しかし「わが子」という愛着の気持の中に「だから自分の思い通りに育てたい。思い通りにできる」という願望がないだろうか。その時、自分の意志、感情、考えをもった一人の独自な人間として子どもを認め、子どもに接していくことができなくなる。そのような親の所有的態度により子どもの自立はさまたげられることになる。

さて、子どもの側に立つてみるとどうであろうか。他人と代りえない独自の存在としての自分を示す名前は自分で選ぶのが、最もふさわしいことなのである。しかしその大事な自分の名前の選択が自分のあずかり得ないところになされ、与えられるのである。

幼い頃は「花子ちゃん」と呼ばれ、「はい」と返事をする。自分の名前を当然のこととして受入れている。しかし幼稚園や小学校に入り、多くの人に接し、さまざまな名前のあることを知るようになる。時には同姓同名の人に出会ったりする。珍しい名前だからかわれたりすることもある。子どもは改めて自分の名前を意識する。平凡な名前にがっかりしたり、立派な名前に圧倒されたりもする。

私自身は小学校、中学校の頃、親はなぜ、こんな平凡な名前をつけたのだろう。佐藤という苗字がありふれたものに名前まで、と親をうらめしく思うこともあった。中学に入った頃、ある人から「あなたの名前は『あやこ』と読むのですか」ときかれ、「あやこ」

の方がすてきだなと感じ、その後しばらくは「あやこさん」と呼ばれた時には、訂正せずに「はい」と応じていた。しかしいつ頃からか、「文子」という極めて平凡な名前に愛着を感じるようになり、今では、自分と名前はすっかり仲良くなっているようである。

考えてみると、これは名前だけに限られたことではない。私たちはこんな父・母を両親として生れてくることを選んだのではない。今の時代に日本に生れたいと願ったのでもない。「もつと美人に生れたかった」、「もつと頭がよければ」……選択が可能だったらもつと別の人生が歩めただろうに思うこともしばしばある。しかし選択の余地もなく、私たちはまさに生み落されるのである (I was born)。しかも非常に無力な状態で。このような宿命、運命を受入れずには、私たちは生きることができないし、また発達もしない。

親は自分の生んだ子に対する責任として子どもに名前を与える。このような人になってほしいと期待と願望をこめて——、しかし名前と呼ばれた瞬間に、子どもは親の所有物ではなく、一人の独立した個人になるのである。たとえ一人で食事や排泄ができないにしても、そして子どもは与えられた名前をもった個人として、自分の人生を歩んでいかなければならないのである。

トルーニエの本を読みながら、「名前」というごく日常的であたり前のことに、人間が生きることの根底にあるこんな大事なことが含まれていることを改めて知らされた思いがした。

(岩手大学教授)